

## 中国語における指示詞と視点移動 —文脈指示を中心に—

高 芑

### 1. 問題提起

指示詞に関する研究においては「現場指示」と「文脈指示」という二つの観点<sup>1</sup>から分析したものが多くみられる。

(1) (服を手にしながら)

这是我新买的大衣。

【現場指示】

[これは新しく買ったコートです。]

(2) 有时不知何故远处会传来一声巨响，小朋友都知道那是空军在投弹轰炸。

《看上去很美》

【文脈指示】

[時々どこか遠くから大きな音が伝わってくる。それが空軍の爆弾の炸烈する音であることを子供たちはみんな知ってる。]

指示詞の分析は、文脈<sup>2</sup>と離れてはあり得ないものであり、一旦文脈と離れてしまうと指示詞の指し示すものが不確定なものになってしまう<sup>3</sup>。身振りや手振りが無ければ、表現例(1)の“这”が何を指しているのかわからないし、表現例(2)においては先行文脈がない限り“那”の指示対象は不明である。

(1) 这是我新买的大衣。 → ドレガ？

(2) 小朋友都知道那是空军在投弹轰炸。 → ナニガ？

現場指示の場合、話し手の身振りや手振りおよび表情に頼り、指示詞を用いなくても指示対象を認識することができ、ある程度対話をスムーズに展開していくことができる<sup>4</sup>。例えば、話し手が遠くの山を指差して聞き手に向かって“有多高？”[どれくらいの高さがあるの]、“太美了！”[ほんとうにきれい]などと表現することは十分にありうることである。しかし、文脈指示の場合、例えば表現例(2)において指示詞“那”がなければ、“有时不知何故远处会传来一声巨响。”と“小朋友都知道是空军在投弹轰炸。”の関係が明確ではなくな

る可能性が生じる。即ち、“小朋友都知道”の“知道”の内容は必ずしも“是空军在投炸弹”とは限らなくなる。次の表現例においても同様である。

- (3) 原先两旁也都是数起来叮当响的大商店，只是那时两旁的梧桐树又多又密，那些大商店就像蒙着薄纱的贵妇…… 《我们都是陌生人》

[道路の両側はもともと指折りのデパートばかりだった。ただ当時は道沿いにアオギリが密植していて隙間もほとんどなかったのもので、それらの店はまるでベールを被った貴婦人のようで…]

- (3)′ 原先两旁也都是数起来叮当响的大商店，只是那时两旁的梧桐树又多又密，大商店就像蒙着薄纱的贵妇……

表現例(3)の“大商店”の前の指示詞の“那些”が前文の“数起来响叮当的大商店”を同定しているのに対し、統語的に成立する表現(3)′には指示詞の“那些”による同定指示対象がないため、“大商店”は必ずしも「指折りのデパート」と一致するとは限らず、複文形式の一文として成り立ちがたく、“数起来响叮当的大商店”と“像蒙着薄纱的贵妇”との間の関連性が稀薄になってしまう。

本稿は、指示詞がこのような文脈指示において、どのような働きをしているのかについて、文脈指示を中心に、視点移動の角度から中国語における指示詞の用法と役割を分析していく。

## 2. 文脈指示に関する定義

### 2.1 広義の文脈指示

文脈指示とは指示対象（先行詞）が言語的文脈の中に存在する場合の指示である（仁田・宮島1995:619）。その場合、通常前方照応と後方照応の二つに分けられる。

- (4) 她觉得自己已经有点儿麻木了，对任何的外来的刺激都没有什么反应，这是让她伤心的事。 《我们都是陌生人》

【前方照応】

[彼女は自分がすでに無感動になり、外からのどんな刺激に対してもすべて無反応になってしまったことに気づいた。それで彼女は悲しんでいるのである。]

- (5) 奇怪的是这个：我们俩吵架，院里的人总说我不对。 《柳家大院》

【後方照応】

[不思議なのは次のことである。私たち二人が喧嘩すると、近所の人た

ちがいつも私が悪いというのだ。]

表現例(4)における指示詞“这”は“她”今の心情（先行文脈の“自己已经有点儿麻木了，对任何的外来的刺激都没有什么反应”）を同定しており、語り手が“她”の立場から彼女の気持ちを描写しているため、“那”に置き換えるのは不適切である。後方照応の場合にも、通常指示詞“这”が用いられ、表現例(5)における“这”を“那”に置き換えることはできない。同様のことは、日本語のコ系指示詞の後方照応機能にもみられる<sup>5</sup>。そして、指示詞には表現例(4)、(5)のような文脈指示のほかに、表現例(6)のような用法もみられる。

(6) 上官紫云来上海的那一年才16岁。 《我们都是陌生人》

[上官紫云が上海に来たその時はまだ16歳になったばかりだった。]

(7) 方晓芙的父母是历经沧桑的那一代知识分子。（同上）

[方晓芙の両親は波瀾万丈の人生を送ったあの世代のインテリである。]

表現例(4)、(5)と異なり、表現例(6)の“那一年”は小説の冒頭に現れ、表現例(7)“那一代”は方晓芙の両親をストーリーに導入する際初めて言及したものであり、いずれも同定すべき指示対象が文脈の中に現れていない。その指示対象は話し手（小説等の場合書き手）の観念の中には予め存在している。堀口1992は「当人が観念の中に浮かべている事物」を対象としていうものを観念対象指示と呼び、「観念対象指示の用法は、指示する対象の実態を他に示さないという点において、現場指示・文脈指示の用法とは異質である」（81頁）と指摘している。本稿では、表現例(4)、(5)のようなテキスト内指示と表現例(6)、(7)のような観念指示を合わせて広い意味で「文脈指示」とよぶことにする。

表現形式が異なれば表す意味も異なり、知的意味が同一であってもニュアンスは異なる。表現例(6)と(6)'a,bとの違いをみてみよう。

(6)' a. 上官紫云来上海时才16岁。

b. 上官紫云来上海这一年才16岁。

聞き手に情報を伝達する際、既知情報と未知情報によって話し手の伝達方法が変わってくる。聞き手にとって既知情報である（話し手がそう想定する）場合、簡単な形式（code）が選ばれ、未知情報である（話し手がそう想定する）場合、複雑な形式が選ばれる（以下のヒエラルキーを参照）。

**零形式** > 代词 > 光杆名词 > 代词 / 指示词+名词 > 限制性定语+名词  
> 修饰性定语+名词 > 关系从句

(簡単な形式 ←————→ 複雑な形式)

(方梅2005:48、下線と ( ) の内容は引用者による)

表現例(6)に比べ、表現例(6)'aはゼロ形式(“～時”)であり、表現例(6)は「指示詞+名詞」(“～那一年”)である。方梅2005のヒエラルキーによれば、表現例(6)の表現形式は表現例(6)'aより複雑であるため、表現例(6)'aに含まれている情報は既知情報であると判断することができる。従って、初めて登場した主人公上官紫云に関する読者の情報はほぼゼロであるため、書き手はゼロ形式を使わず「指示詞+名詞」(“那一年”)を用いていると解釈できる。また、同じ「指示詞+名詞」の形式を用いた表現例(6)“那一年”と表現例(6)'b“这一年”であるが、“那一年”を用いる表現例(6)においては、描写の中心となるのは主人公である上官紫云がわずか16歳の若さであり、具体的な年号を示す必要がないため、漠然とした“那”を用いるのが適切である。それに対し、表現例(6)'bのように“这”に置き換えると、焦点が“这一年”に移り、「そのとき上官紫云がまだ若かった」ということを強調する働きが弱くなり、読者に“这一年”の中に一体何が起きたのか」ということに関心を持たせる表現となる。また、次の表現例(7)'において、“历经沧桑”はすでに過去のことであるため、その時代を経験してきた世代のインテリたちが目の前に存在しない限り、指示詞“这”を用いて指示対象を同定するには無理がある。

(7)' 方晓芙的父母是历经沧桑的这一代知识分子。

## 2.2 問題点

指示詞“这”“那”の使用には、非対称性が存在しており、この点については呂叔湘 1980、呂叔湘 1985、曹秀玲 2000、邹韶華 2001 等の先行研究がみられる。その中の呂叔湘 1985 の“这”“那”の非対称性に関する指摘は次のようにまとめることができる。

A 前方照応の場合、“这”“那”いずれも使える。

後方照応の場合、“那”を使わず“这”を用いる。

(8) a. 要说到现在他一点儿都不知道，那/这就怪了。【前方照応】

[彼が今も全く知らないというなら、それはおかしい。]

- b. 你给我评评这 / 那个 : 我的车他随便骑, 他的车我一骑也不让骑。

【後方照応】

[私の自転車は彼が乗りたいとき自由に乗っているのに、彼の自転車には全然乗らせてくれないなんて、これが正しいのかどうかあなたが裁いてください。]

- B “这”は過去、または現在のことを指し示すことができる。

“那”は過去のことしか指し示さない。

- (9) a. 这 / 那年他上了大学。【過去を指す】

[この / その年彼は大学に上がった。]

- b. 这个月他出差去了。【現在を指す】

[今月彼は出張に行ってしまった。]

- c. 那个月他出差去了。【過去を指す】

[その月彼は出張に行っていた。]

(呂叔湘 1985 : 188~190 参照。二重下線及び体裁は筆者による)

しかし、指示詞“这”“那”の使用についてはすべてこの呂叔湘の指摘の通りに説明できるのであろうか。例えば、表現例(9)bの“这个月”に関して、「現在を指す」とする呂叔湘の指摘には検討の余地があると思われる。また、表現例(10)の“那”に同定された指示対象は指示詞の後の波線部分であり、後方照応の用法であることは明らかである。

- (10) 肖凯只能拿那几句“置死地而后生”、“不入虎穴焉得虎子”来安慰自己。

《我们都是陌生人》

[肖凯はただあの「乾坤一擲」や「虎穴に入らずんば虎子を得ず」のようなことばで自分を慰めるしかない。]

さらに、表現例(6)“那一年”と表現例(6)’ b “这一年”における文脈指示の違いは表現しようとする内容にあるのに対し、次の表現例(11)の場合、“这一年”を用いると、行事が行われる恒常性が窺われることとなる。一方、“那一年”を用いる場合、「過去一年」が指示対象として同定されることとなるため、やや不自然な表現となってしまう。このように見てくると、呂叔湘の“指上文, 用‘这’和‘那’都可以”という指摘に首肯することはできない。

- (11) 等到一年结束, 必要请个巫师到家来还愿, 算是跟鬼神了结了这 / ?那  
一年平安共处的日子。 《云雾边城》

[一年の終わりには、必ず祈祷師を家まで招き願ほどきをする。鬼神と

この一年間平和に暮らしてきたことにけりをつけるためである。]

以上の問題点のほかに、日常会話および小説において、次のような表現例もしばしばみられる。

- (12) 她觉得母亲已经从自己的生活中消失了很久，那种人世间最普遍、最热烈的情感，居然一点儿都没有在她的生活中被演习过。

《我们都是陌生人》

[彼女は母がすでに自分の生活の中からとくに消えてしまったと感じている。あの世の中で最も普遍的な感情や、最も情熱的な感情を彼女は生活の中で意外にも一度も経験したことがなかった。]

- (13) 在艺术面前总有一些人——极小的那一部分，他们是得到上帝特别眷顾的。（同上）

[芸術の前ではいつも一部の人、ごくわずかな一部の人だけが、神様の特別な寵愛を手に入れるのである。]

表現例(12)の“那种情感”の指示対象は先行文脈に現れておらず、過去・現在・未来のいずれにも設定されうる。母親から愛情を注がれて子供が成長していくという一般的な常識は誰でも知っている。そういった人々の心に潜在している子供が母親に縋る気持ちを喚起するために、指示詞“那种”が用いられている。表現例(13)の“那一部分”は前方照応であるが、必ずしも必要とされる文成分ではない<sup>6</sup>。

- (13)' 在艺术面前总有一些人——极小的一部分……

以上の問題点を踏まえ、文脈指示と視点移動との関わりについて考察していく。

### 3. 指示対象を焦点化させる指示詞

#### 3.1 談話標識 (discourse marker) に関する先行研究

方梅2002: 347は「談話標識となる指示詞は、指示詞に導入された指示対象が初めて談話の中に現れる非照応的な用法を有する」と指摘し、この場合の“这”“那”は“这个”“那个”に置き換えることができないとしている。

- (14) 这过日子难免不铁勺碰锅沿儿。

(方梅2002: 347、下線は引用者による)

[生活していく上ではぶつかることから免れられないもだ。]

→ \*这个过日子难免……

“过日子”はゼロ指示項であり、具体的な事柄を指すものでもなければ、照応された内容を示すものでもない。沈家煊1999:221は「典型的な話題(topic)は既知情報であり、通常「定」的なものである。」と指摘している。例えば、表現例(15)のような不定なものが文頭に置かれると、話題としては成立しがたい。

(15)? 一个学生来找你。(有一个学生来找你。)

[ある学生があなたに会いに来た。]

\*一个朋友咱们交。(咱们交个朋友。)

[私たちは友達になりましょう。]

\*头她点点。(她点点头。)

[彼女は頷いた。]

\*一场病他生了。(他生了一场病。)

[彼は一度病気になった。]

(沈家煊1999:221)

指示詞の役割は未知情報を既知情報に変えたり、限定性の低いものを定名詞のような成分に変えたりすることである<sup>7</sup>。先の表現例(14)は夫婦喧嘩についてのコメントである。“过日子”は初めて文脈の中に現れ、“这”が加わることにより「生活していくということは」という新しい話題が提起され、この場合の指示詞“这”が談話標識となっている。従って、方梅2002:347は「談話標識となる指示詞の用法は文脈指示の延長と考えられる」と指摘している。

また、Fraser1990は談話標識となる表現の特徴を次のようにまとめている。

(ア)少なからず多義性がみられる。

(イ)文全体の意味内容に影響しない。

(ウ)その位置には文頭、文中、文末の三つがある。

(エ)他の意味を生じない。

(オ)他の解釈的な語用マーカと分別することができる。

梁敬美2002:9は、Fraser1990が指摘した上記の特徴に基づいて、「談話標識は実詞(content forms)でもないし、恣意的な表現形式でもない。それは語用的な類型であり、注釈的な性質を持つ語用的なマーカである」と述べている。談話標識自身が構造を持っており、組織的な語用表現であり、聞き手が内容を理解

するには極めて重要な働きをしている。また、Lenk1998は談話標識が口頭表現にみられる形式であることを指摘し、談話標識となっている指示詞“**这**”の用法が日常会話の中によくみられるのはそのためであるとしている。

張伯江・方梅1995は指示詞“**这**”にはそれに指示・代用されるものを焦点化させる働きがあると述べている。次の表現例(16)における三つの“**这**”の中で、Aの“**这**”は総称的な指示<sup>8</sup>であり、今回は分析の対象とはしない。ここではB、Cの指示詞用法についてみていく。

- (16) 这<sub>A</sub>老婆我还有一比，好比手里这<sub>B</sub>烟，这<sub>C</sub>烟对身体有害是都知道的，  
为什么还有那么多人抽？

[女房というものには、俺には一つのたとえがあるんだ。それは手に持っているこのタバコのようなもんだ。タバコというものは体によくないのは誰でも知っているのに、どうしてあんなにたくさんの人が吸っているんだい。]

(張伯江・方梅1995：149、下線・記号等は引用者による)

Bの“**这**”は話し手が手にしたタバコを指し示し、現場指示の用法といえる。“**烟对身体有害是都知道的**”は常識であり、指示詞<sub>C</sub>“**这**”の同定がなくても統語的にも意味的にも文の成立に何ら支障を生じさせるものではない。この場合、指示詞“**这**”によって、“**烟**”が焦点化され、聞き手の注目をひきつける役割を果たしている<sup>9</sup>。このことは日本語における「コ」系についても適用することができる。

- ①近称のコは明らかに文脈指示においては有標であり、何らかの強調的な効果をもたらす。

- a. 山下君から<sup>o</sup>話を聞いたよ。適当な運動は体にいいらしいね。
- b. 山下君からこんな話を聞いたよ。適当な運動は体にいいらしいね。

(金水・田窪1900)

aの「話を聞いたよ」とbの「こんな話を聞いたよ」を比べると、前者は話の内容を必ずしも問題にしなくてもよいのに対し、後者は話の内容が必ず問題になるという違いがあることに反映される<sup>10</sup>。

- ②文脈指示のコは『卓立性』を持つ。

- c. 家族を支えてきたのは私だぜ。この私一人だ。



d. 家族を支えてきたのは私だけ。〇私一人だ。

(金水・田窪1992)

日本語の「コ」系指示詞と平行して、先行詞（同定対象）を焦点化する機能は中国語の“这”だけではなく、“那”にもみられる。

### 3.2 “那”による指示対象の焦点化<sup>11</sup>

高苅2004: 47では「人称代名詞+“这个”+NP」の形式について、話し手が話の焦点をNPのほうに移し、聞き手の関心を引き寄せる働きを積極的に果たしていると指摘した。一方、話の焦点を指示詞の後の部分に移し、指示対象を焦点化する役割が“那”にもみられる。

- (17) (子供の“我”は厳しい保育士の“李阿姨”が化けて人間の姿をしているものではないかと疑っている。“李阿姨”が皆に“宝塔糖”を配るのは子供たちを食べたいからだと思って、方枪枪に忠告をした。) **我提醒方枪枪要警惕，李阿姨的糖那是随便吃的吗？《看上去很美》**

【前方照応】

[僕は方枪枪に忠告した。李お婆さんの飴はタダで食わせるものじゃないぞ。]

表現例(17)の“那”は話し手の目の前に飴がない限り、“这”に置き換えることができない<sup>12</sup>。保育士の李お婆さんが子供たちに塔の形をした虫下しを食べさせ、それを食べた子供たちには当然ながら薬物投与後の生理的な反応がみられる。平素李お婆さんのことが嫌いな“我”はそこで李お婆さんがもともと化け物だという主張をする前に、指示詞の“那”で先行詞の“李阿姨的糖”に焦点を当て、他ならぬ“李阿姨的糖”であることに焦点を当て聞き手の注意を引いているのである。指示詞を用いず“李阿姨的糖是随便吃的吗”にすると、ただの反語文<sup>13</sup>になってしまう。表現例(17)における指示詞の用法と同じように、表現例(18)における“那”も指示対象を焦点化させる機能を果たしている。

- (18) (晓芙が恋人の吕翰明に自分がイギリスへ短期留学しに行くことを打ち明けた後)

吕翰明显然被这样的一个决定给震住了，他不知道方晓芙究竟要怎么样，可是一直徘徊在他心中的那个要失去晓芙的感觉，就这样在眼前晃，最重要的是他已经没有选择了。 《我们都是陌生人》

## 【前方照応】

[呂翰明は明らかに曉芙のこういった決断に途方にくれてしまった。方曉芙が一体何をしようとしているのかは彼には分からなかった。しかし、呂翰明の心の中にはずっと前からいずれ曉芙を失うんだという気持ちがあり、それが今まさに目の前にあるのである。肝心なのは彼には選択肢がすでになくなっていったことだ。]

→ i. \*可是一直徘徊在他心中的这个要失去晓芙的感觉

→ ii. 可是一直徘徊在他心中的要是去晓芙的感觉

表現例(18)では、以前からという意味を表す副詞“一直”は“要失去晓芙的感觉”がここではじめて導入されるものではないことを意味し、その意味で“那个”を“这个”に置き換えることはできない。本稿の2.1では「話し手が聞き手に伝達する情報について、聞き手が当該情報を知らなければなる（と話し手が想定する）ほど、複雑な形式を選ぶ」とする方梅（2005）の指摘を提示した。

情報量	多い	————→	少ない
形式	指示詞+名詞	>	限定性修飾語+名詞

iii. 那个要失去晓芙的感觉<sup>14</sup> ii. ①一直徘徊在他心中的②要失去晓芙的感觉

ii の表現形式は「限定性修飾語+名詞」の形に当たる。指示詞の“那个”が現れないため、①と②を合わせて“感觉”を修飾し、①と②は並列関係にある。従って、「どんな気持ち」という質問に対して①と②はいずれも単独で答えることができる。しかし、原文の①と②は並列関係ではなく、①は②の修飾成分である。従って、指示詞の“那个”を用い、読者の関心を再び“呂翰明要失去晓芙”という事実に向かわせるのである。また、小説の中では呂翰明の心配事についてそれまで何回も触れているため、呂翰明の“要失去晓芙的感觉”は読者にとって情報量の多いものとみられ、ii の表現は2.1でみたヒエラルキーに違反していることになる。

## 4. 視点移動

### 4.1 視点

小説においては人称代名詞の使用によって、語り手の視点が決定される。一般によく用いられるのが一人称と三人称である。一人称を使用する場合、語り手が主人公と一体化し視点は主人公側に固定されており、三人称の場合、語り

手が客観的な立場から物語を展開させ、視点は語り手側に固定されている。創作のテクニックの一つとしては、一つの小説の中で人称代名詞が固定していない場合もある。澤田1993:303は「一般に、ある表現内容に対する話し手の描写の方向が、話し手自身の側からのものであるのか、あるいは、文中の話題化された人物の側からのものであるのかということは表現形式に重要な違いをもたらすことがある」と述べている。例えば、小説全体が三人称で統一されている中では、主人公は独白等において一人称を用いるのが一般的である。

#### 4.2 指示詞による視点移動

話し手は話題を更に進展させ、内容に関する解釈を導くため、談話標識を用いる。小説など文学作品においては、談話標識を用いて話し手（語り手）の視点を移動させることができ、指示詞にも人称代名詞と同じような働きがみられる。即ち指示詞“这”“那”の入れ替えによって視点移動という目的を果たすことができるのである。視点が一定されている場合、語り手は写真家がカメラを用いて自分の好みで景色をカメラに収めるように描写する。それに対して、視点移動の場合、語り手は運動会に参加する親がビデオカメラを用いて走っている子供を撮影するように視点を移動しながら描写する。次の表現例をみてみよう。

表現例(20)の晓芙はある日偶然母の日記から、長年自分のことをずっと可愛がってくれていた大好きな父が本当の父親ではないことを知った。ショックを受けた晓芙はしばらく家を出る。表現例(20)は晓芙が家を出た後から家に戻るまでの間について描写したものである。

(20) 晓芙在这个<sup>①</sup>城市的南边，一个山清水秀的小镇，住了十来天。这样<sup>②</sup>一个清静的地方，……只是想暂时抛却一些烦恼]，能够在这边<sup>③</sup>安安静静<sup>④</sup>地过几天。她自己甚至不知道，在那几天<sup>⑤</sup>里，她随意所作的写生，几乎成了晓芙最率真的画，无论是线条或者色彩都那么<sup>⑥</sup>和谐。……等到她回到这个<sup>⑦</sup>城市、回到这个<sup>⑧</sup>家的时候，才知道家里出了大事。

《我们都是陌生人》

[晓芙はこの町の南のほうにある山も水も綺麗な小さな村に十日近く泊まっていた。静かなところ、……ただしばらく悩みを忘れ、そこで静かに何日か過ごしたかったのだ。そこにいる間適当に画いたスケッチのほとんどが彼女にとって最も素直な絵になっているのは晓芙自

身でさえも気が付かなかった。線にしても色にしてもいずれも調和が取れている。……あの家に戻って、初めて家の中で大きなトラブルの起きたことを知った。]

①～⑦では指示詞を用いているが、統語的に必須成分であるのはおそらく④の“那几天”のみだと思われる。言い換えれば、④を除いた①～⑦は指示詞がなくても文章自体の成立に何の支障も生じないということである<sup>15</sup>。ここで興味深いのは指示詞の“这”“那”によって形成されている視点移動の「軌道」である。カメラマンが高いところから町全体の風景を撮るように、語り手が客観的な角度から談話標識の“这”を用いて描写し始める。町の南のほうにある“小镇”に視点を置いて描写した後、それが過去のことであることをクローズアップし、“小镇”に滞在している間晓芙が描いた絵（これらの絵は後に晓芙に破られ、ストーリーの転換において大きなきっかけとなっている）について描写する。そうした後に“这”を用いて視点を現実に戻させる。視点移動のリンクを完成させるのは指示詞“这”“那”の入れ替えによるものである。

指示詞は動詞・名詞・形容詞など実質的な意味を持つものと異なり、前後の承接関係を表すものである。表現例(21)における時間に関する指示表現をすべて取り除き表現(21)'のようにして、両者を比較してみる。

- (21) (たまたま実家に帰ってきた晓芙は自分に関する母佩珊の秘密を発見し、更に確認するチャンスが来た)

这一天<sup>①</sup>是佩珊每个月到医院去配药、看病的时间。……等到晓芙醒来，家里又是空无一人。那个吸引她一整夜的抽屉居然依然还是那样没有上锁的开着。这一次<sup>②</sup>方晓芙没有按住，……这到底是怎么一回事？……晓芙感觉到呼吸发生了困难，那一刻<sup>③</sup>，她有些记忆空白，……

(同上)

[この日は佩珊が毎月病院へ薬を調剤し診察する日だ。……晓芙が目覚めると、家の中には誰もいなかった。あの一晩ずっと晓芙を引き付けている引き出しはまさに依然として鍵はかかっておらず開いたままだった。今回は晓芙は自分の気持ちを抑えきれず……これは一体どういうこと？……晓芙は呼吸が困難になった。その瞬間、晓芙は頭が真っ白になった。]

- (21)' <sup>a</sup>/<sub>a</sub> ~~有一天~~ <sup>b</sup>是佩珊每个月到医院去配药、看病的时间。……等到晓芙醒来，家里又是空无一人。那个吸引她一整夜的抽屉居然依然还是那样没有上锁的开着。<sub>b</sub>方晓芙没有住，……这到底是怎么一回事？……晓

芙感觉到呼吸发生了困难，她有些记忆空白，……

表現例(21)の①“这一天”は指示詞の非照応的な用法であり談話標識となっており、表現例(21)'aのようにするといずれも非文となる。曉芙がはじめて母の日記を覗いた後の複雑な気持ちと振る舞いについてのそれまでの描写から一転し、読者を「この日にいったい何が起きたのか」に注目させる、即ち“这一天”に向かわせる。ここでは視点の移動が起こっている。前回はちょうど曉芙が佩珊の日記をもっと覗こうとしたとき、帰ってきた母親の足音が聞こえていた。今回は、曉芙がどんな行動をとるのか、今回の曉芙の行動に焦点をあて、視点を①“这一天”から②“这一次”へ向かわせている。あまりにも衝撃的な事実（本当の父親が別人かもしれない）の前で曉芙は崩れそうになった。これまでの流れで推移していくと、出生の秘密が分かった曉芙の心境を描写するには、視点をさらに“这一次”から“这一刻”へ移動させなければならないことになるが、表現例(21)には③“那一刻”が用いられている。実は表現例(21)の続きは“这一天”の後の出来事を語るものではなく、モンタージュの手法<sup>16</sup>を用い、数日後の曉芙に切り替えられている。一見、視点移動が切れたようにみえるが、実はそうではない。数日後の曉芙に切り替え、“那一刻”を用いることによって、視点を過去に向かわせクローズアップさせている。

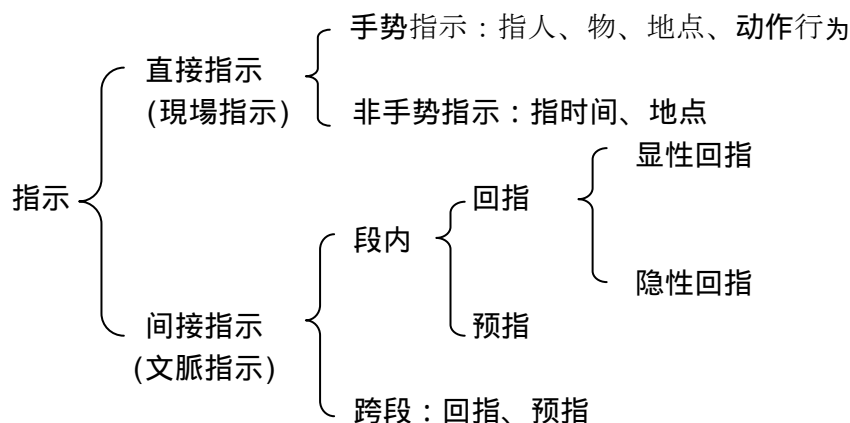
表現例(21)'のように指示表現が取り除かれると、こういった視点移動は見られず、せつかくの素晴らしい景色もとりとめもなく、変化に富んだストーリーもつまらぬものになってしまう。

## 5. まとめ

指示詞の用法の一つである文脈指示は、前方照応と後方照応の二つに分かれる。本稿では、文脈指示を中心に指示詞と視点移動の関わりについて考察した。指示詞は指示対象を焦点化させるという重要な役割を果たしている。小説の中で、創作のテクニックの一つとして、人称代名詞（特に一人称、三人称）の交替に代わって、指示詞が書き手の視点の移動軌道を明白に描き、時間の概念（発話時以前、発話時及び発話時以後）を無造作に切り替え、読者に映画を鑑賞するような感覚を与えることに貢献しているといえることができる。

## 注

- 1 現場指示と文脈指示については、それぞれさらに下位分類が設定される。



(王道英 2000 : 55 参照、( ) と体裁は引用者による)

- 2 現場指示は対話文においては、「文脈」というタームより「場面」のほうがより適切であるが、ここでは説明の便宜上「文脈」に統一する。
- 3 S.C.Levinson 1983 は“从本质上讲,指示现象牵涉到语言如何用语法表示出语境特征,因此它也涉及如何依靠语境分析来理解说的话。”と指摘している。(沈家煊訳<语用学论题之五：指示现象(上、下)>
- 4 現場指示とは指示対象が五感で認識可能な場合である。(仁田義男・宮島達夫 1995:619)
- 5 建石始 2005:36 は「コ系の指示詞は『聞き手に注目させる』という談話的機能を明示するために使用される」と指摘している。
- 6 概念が異なればそれに対する認識も異なる。既知情報と未知情報との間には推測しやすい情報も存在している。それは聞き手が自分の経験などの言語外知識を頼りに推測できる情報であるからである。表現例(12)、(13)における指示詞はそれに関係する用法であり、今回の分析対象とはしない。
- 7 运用指示词直接加在一个未曾提及的事物及行为前面,这是信息包装的一种手段,目的在让这个位置上的成分在形式上符合话题位置的默认条件。(方梅 2002 : 347 参照)
- 8 張伯江・方梅 1995 : 149 を参照。また、沈家煊 1999 も「限界」(bounded)と「非限界」(unbounded)の概念を用い、名詞的な成分に伴う指示詞“这、那”が伴う名詞性成分にもときには総称的で、個を指し示さないものもあり、「非限界」であると指摘している。
- 9 先行文脈で話し手の妻についての話題が取り上げられており、指示対象“老婆”ははじめて文脈の中に現れるものではない。従って、A “这老婆”と C “这烟”とは区別される。
- 10 建石始 2005 : 36 参照。
- 11 「指示詞“这”“那”が名詞を修飾する際、指示対象を話題として引き出す効果がある」と張伯江・方梅 1995 は指摘している。本稿では、指示詞の使用によって、指

示対象を新しい話題として引き出すのではなく、指示詞には指示対象を焦点化させる役割のあることを主張する。たとえ、目の前に飴があって、“那”から“这”への置き換えが可能だとしても、やはり不自然と感じられる。この場合は、指示詞の働きが現場指示の用法を越えているからである。

- 13 「李お婆さんの飴は気ままに食べるもんか」、或いは「李お婆さんの飴は気ままに食べてはいけませんよ。」という反語文は親が子供を説教する際に用いる語気としては適切である。
- 14 “一直徘徊在他心中的那个要失去晓芙的感觉”を“一直徘徊在他心中的感觉”と“那个要失去晓芙的感觉”の二つに分け、iiiはその後半を表すものである。
- 15 ②、⑤の指示詞を副詞に置き換えれば、文章全体のバランスを保つことができる。例えば、“一个非常清静的地方”、“无论是线条和色彩都非常和谐”。
- 16 本来、機械の組み立てや据え付けを意味したこのフランス語（montage）は、1920年代のロシアで映画の編集理論へと応用され、映画の組み立て方を考えるキーワードとなっている。

### 引用・参考文献

- 曹秀玲 2000<汉语“这／那”不对称性的语篇考察>《汉语学习》第8期
- 方梅 2002<指示词“这”和“那”在北京话中的语法化>《中国语文》第4期  
——2005<篇章语法与汉语研究>《语言学前沿与研究》上海教育出版社
- 梁敬美 2002《“这”、“那”的语用与话语功能研究》中国社会科学院（博士学位論文）
- 呂叔湘（編）1980《现代汉语八百词》商务印书馆  
—— 1984《语文杂记》上海教育出版社  
—— 1985《近代汉语指代词》《吕叔湘文集》第3卷 商务印书馆(1992)
- 沈家煊 1999《不对称和标记论》江西教育出版社
- 王道英 2005《“这”、“那”的指示功能研究》学林出版社
- 邹韶華 2001《语用频率效应研究》商务印书馆
- 張伯江・方梅 1995<北京话指代三题>《吕叔湘先生九十华诞纪念文集》商务印书馆
- 高芑 2004『現代中国語指示代名詞“这”“那”に関する研究』名古屋大学大学院国際言語文化研究科 修士論文  
—— 2006「中国語の指示代詞“这”“那”の虚化について」『多元文化』第6号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 金水敏・田窪行則 1990「談話管理理論から見た日本語の指示詞」『認知科学の発展 3』講談社 サイエンティフィック
- 金水敏・田窪行則編 1992『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房
- 建石始 2005「談話的機能の観点から見た後方照応」『日本語教育』124号1
- 澤田治美 1993『視点と主観性 — 日英助動詞の分析 — 』ひつじ書房（1995）
- 仁田義雄・宮島達夫 1995「コノとソノ — 文脈指示の二用法 — 」『日本語類義表現の文法 下 単文篇』くろしお出版社

堀口和吉 1990 「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』9-3

——— 1992 「指示語の表現性」『日本語研究資料集』第1期 第7巻 ひつじ書房

Bruce, Fraser. 1990. "An Approach to Discourse Markers" *Journal of pragmatics* (14):383-395.

S.C. Levinson. 1983 *Pragmatics* London Cambridge University Press (沈家煊訳  
1987<语用学论题之五：指示现象（上、下）>《国外语言学》第2、3期)

Ura, Lenk. 1998. "discourse markers and global coherence in conversation" *Journal of pragmatics*(30) Special issue on: 'discourse markers and coherence relations':245-257

### 例文出典

董懿娜《我们都是陌生人》(《作家杂志》2002年第12期)

老舍《柳家大院》(作家出版社)

王朔《看上去很美》(华艺出版社)

蒋子丹《云雾边城》(《作家杂志》2002年第12期)